

スターリン主義のテキストと身体

平松 潤奈

テキストと身体は必ずしも対立するものではない。テキストは身体から生み出され、身体は多様なテキストのなかに表象される。身体自体がそこから何かを読み取られるべきテキストでありうるし、テキストにも身体性と呼べる次元があるはずだ。身体とテキストの関係性はさまざまである。しかしそれではなぜ、「テキスト」と「身体」という語が選出されるのか。どのような関係性においてであれ、この二語、二概念が並置されるからには、両者の対立性あるいは少なくとも通約不可能性が問題となる局面があるのだろうか。本稿は、そのような二者の対立性が極限まで押し進められているかに見える文化——スターリン文化——をめぐっての議論である。なぜ二者が対立するものとして思考されるのかを問うことによって、この文化を論じる際の限界と可能性を探っていきたい。

まずは身体というテーマからいくらか離れたところから話を始めることにするが、この離れているということ自体がスターリン文化においては意味をもっているのである。

1. 閉ざされたドアの背後で アーカイヴ革命後の知見と構築主義

ソヴィエト連邦崩壊にともない情報公開・アーカイヴ革命が進行していった 1990 年代の末、『大粛清への道 スターリンとボリシェヴィキの自壊 1932-1939 年』と題した分厚い本が出版された。1930 年代のボリシェヴィキ党指導部の内部文書を中心に編纂し、それに解釈を付したものである。学術的に高い評価を受けているというこの資料集において、編者・解説者であるゲッティとナウモフは、新資料を通じたスターリニズムの構造解明という課題に対して慎重かつ繊細な姿勢を見せている。本論文が着目したいのは、その序論のなかで彼らが述べる方法論的なスタンスの問題だ。少し長めだが引用する。

話を先に進める前にことわっておくと、われわれは言説〔強調原文〕という語を思想の秩序立った表現という既定の意味で使うのであって、近年の社会理論家たちが発展させた意味において用いるわけではない。〔…〕とりわけ歴史学におけるポストモダニズム的な意味での「言説」とは、歴史家が言語を使用して過去を構築することを指すのであり、まさしく、

われわれが歴史的現実と思っているものをつくりだす言語の特権的な力を指している。しかしながらわれわれが歴史を書くにあたっては、過去についての知識はそれに関する言語を通してのみ存在するとか、「現実」は言説の戦略にすぎないとか、科学と現実は完全に文化的コンテキストに依存しているといったような想定はしない。しかしそれと同時に〔強調引用者〕われわれが見ていくのは、支配的・覇権的・義務的な政治的言説として、スターリン主義のイデオロギーが社会的世界の形づくりを促す強大な力となって、その世界と相互作用していたということである。¹

近代の西洋や日本の言説を扱う最近の社会学や歴史学では、「つくられた〇〇」といった研究が数多くなされているが、そうした研究の手法である構築主義的な言説分析はソ連史を論じるときには通じない、少なくともそのまま受け入れるわけにはいかない、ということがここで述べられている。その理由は明示されていないが、「しかしそれと同時に」以後の文は理由説明として読み込めるように思われる。

「つくられた〇〇」という研究が意味を持つためには、その歴史を経験・再経験する者にとって「つくられた」感がなかったという前提が多少とも必要になるはずだが、ソヴィエト社会のように「イデオロギーが社会的世界の形づくりを促す強大な力であった」とされる場合、つまり世界がイデオロギーによって「つくられたもの」であったことがあまりに自明で、そうした世界は「ウソもの」だとさえ言ってしまうような場合（両者の「相互作用」はあるにせよ）、それを今更「つくられた」と言ってもたいした意味をなさないだろう。むしろそうした「ウソもの」「作りもの」感があまりに強いため、逆にソ連研究では「ウソもの」の背後に「ホンモノ」が暗に措定される必要があったと言える。たとえば、スターリンの秘密日記が見つかったらスターリニズムの暗部がすべて解明されるだろうとか、「リベラル」あるいは「まとも」なボリシェヴィキがいて、スターリンのテロ計画を阻止しようとするところまでいたにちがいない²といった考えだ。ゲッティらは、アーカイヴ資料を読んでいけばそういった見解はもはや通用しなくなるとし、「最も貧しい農民から最高位の官僚にいたるあらゆる人が、スターリン主義システムの内部で生きのび、うまくたちまわるために」「ボリシェヴィキ語」「スターリン語」を使ったと考えざるをえなくなったと述べ、「スターリン主義者たちが、公衆に向かって言ったのと同じことを、閉ざされたドアの背後で互いに言いあっていた」という事実を驚きとともにたびたび記している。こうしたことから、「スターリン主義のイデオロギーが社会的世界の形づくりを促した」、もっと単純化すれば、イデオロギーが世界をつ

¹ J. Arch Getty and Oleg Naumov, *Road to Terror: Stalin and the Self-Destruction of the Bolsheviks, 1932-1939* (New Haven and London: Yale UP, 1999), pp. 18-19. 邦訳は、アーチ・ゲッティ、オレグ・V・ナウモフ編『ソ連極秘資料集 大粛清への道 スターリンとボリシェヴィキの自壊 1932-1939年』川上洗・萩原直訳、大月書店、2001年。〔〕内は平松、以下同様。

² *Ibid.*, p. xiv.

くった、そして「アイデンティティはテキストの産物であった」³ という構築主義的認識がもたらされるだろう。

だがテキストを介してしか現実がつかめないという想定を受け入れるとしても、たとえばすべてのテキストがポリシェヴィキ語でしか語らなかった場合に、それを「現実」と受け止めることができるのだろうか。ゲッティとナウーモフは、「決定的に重要なことではない」としつつも、「ポリシェヴィキは普段から自分自身にウソをつき、互いにウソをつきあっていたのか、また自分が言うことになにかがしかを信じていたのか」⁴ という問いを挙げずにはおれない。これは、みな「ポリシェヴィキ語」をしゃべっていたのは現実の一面には違いないけれども、それはあくまでも「ウソ」という現実なのであり、なにか本音を物語るような別の現実を取りこぼしているのではないかという感覚がぬぐい去れないからだ。もちろんこうした見方は状況を単純化しており、ゲッティとナウーモフによる実際の資料分析においてはポリシェヴィキ語自体のなかに亀裂が多々見いだされている。しかし明確に異論であるテキストが書き記され流布する可能性がきわめて少ない場合、与えられたテキストの背後に別のなにかを措定し、そこに「現実」の支えを見いだしたくなるのは当然であり、それゆえ西洋や日本を対象とした構築主義的言説分析のアプローチとソ連研究は噛み合わないのだと考えられる。⁵ ゲッティが「アーカイヴの秘密はタマネギの皮がむかれるように自らの正体を明かしていく」⁶ と述べているように、そもそも構築的な世界を相手とするソ連史家は、アーカイヴ資料によって歴史を再構築するというよりも、アーカイヴの山を掻き分け、そのなかの核心的な真実に迫っていかねばならないのである。

2. 親密圏研究批判 イデオロギー言語と傷ついた身体

このようにソ連崩壊以降の情報公開は、ウソで塗り固められた公式文書の背後に、アーカイヴや人の心の内奥に、隠された真実・秘密・本音を見いだしたいという欲望を満た

³ *Ibid.*, pp. 23, 22, 24.

⁴ *Ibid.*, p. 27.

⁵ ただしゲッティとナウーモフがここで名指しているような構築主義は、「「極端な見方」に就く社会的構築主義者」の立場であり、テキストを超えたところには何も存在しない、といった見かけ上ラディカルなその主張は、「テキストや言語が存在しているということとはなぜ言えるのか」という問いに答えない限り完全に正当化されることはない（とりわけ身体を研究対象とする場合）。加藤秀一「構築主義と身体の臨界」『構築主義とは何か』上野千鶴子編、勁草書房、2001年、165頁。そうであるから、本稿で扱う身体（とその存在）の問題はすべての構築主義理論と矛盾するわけではなく、むしろ加藤の言うような権力関係において捉えられる構築主義的な身体論は、ソ連社会の特殊な権力構造の文脈のなかで今後なされていくべきものだと考えられる。というのもアーカイヴ革命という出来事の発生が示すように、ソ連社会においては、テキストの存在自体が圧倒的な権力関係によって厳しく管理統制されていたからである。

⁶ Getty and Naumov, *op. cit.*, p. xiv.

す題材を与えた。なかでも近年のソ連史研究で最も注目を集めるのは、スターリン時代の日記や経歴書といった私的テキストであり、その言説分析を行う親密圏研究というジャンルの論文は引用頻度において突出していると言われるが、そこから導き出されるのもやはり、「人はスターリニズムの外部にはいない」という認識にほかならない。⁷

日記研究という分野を開拓し、親密圏研究の代表者ともいえるヨッヘン・ヘルベックによると、スターリン体制への批判は体制のイデオロギー的言語によってしか行われえない。公的イデオロギーが個人によって恣意的に解釈しなおされることがあるという点では、イデオロギーが浸食を受けているとも考えられるが、しかしそうした批判はあくまでもイデオロギー言語の圏内に留まっている。さらに体制の要素がきわめて深く内面化され個人のアイデンティティを規定しているために、体制を批判すれば、それは（たとえ心の中・親密圏においてだけだったとしても）批判者自身の自己崩壊につながりかねなかったのだという。⁸ そうであるから、たとえば体制に受け入れられないと思われるような秘密・病ましさ（富農という出自と、それを隠した生活）を抱えていたある日記執筆者にとっては、内務人民委員部（秘密警察）が唯一、心の重荷から解放される場所であったことになる。「なぜなら、ほかのところではどこであれ生活がまるごとウソになってしまうけれど、〔内務人民委員部では〕真摯に本当のことを話せるのだから」（ステパン・ポドルブヌイの日記より）。⁹ 最も内奥に隠匿されるべき私的な秘密と、最も公的な国家権力とがぴったり一致してしまう場所としての秘密警察が、ソヴィエト的主体にとって最も心安らぐ場所であったとするならば、親密圏を公共圏からの避難所として想定するようリベラルな西欧的主体の概念は、ソヴィエト的主体を考えるにあたっては無効であり、私は公に完全に融解するとみなされねばならない。

こうしてヘルベックは、人が体制の言語を信じていたかどうか、という問いの立て方自体が間違っていると主張するに至る。何ならソヴィエト的主体は良きソヴィエト市民の役割を演じていたにすぎないと言っても構わない。信が問題なのではなく、「むしろ不信を首尾一貫したかたちで分節化することの不可能性」が、「政治体制に対する個人の忠実さの主な源泉」なのである。¹⁰ ゲッティとナウーモフの議論においても信の問題は本質的でないとされていたが、ヘルベックにおいては同じ問題が完全に切り捨てられる。

しかしこのように信の問題を無効にしても、それはすでに別のかたちをとって現れていることがわかる。ウソは体制の言語のなかにはもはや存在しないとしても、ポドルブヌイの日記に書き記されているように、今度は体制に合致したくともしえない個人のなかに生じてしまうもの（「生活がまるごとウソになってしまう」）、秘密警察に出向いて抹

⁷ 松井康浩「スターリン体制下の個人と親密圏」『思想』2003年8月号、15頁。

⁸ Jochen Hellbeck, “Fashioning the Stalinist Soul: The Diary of Stepan Podlubnyi, 1931-9,” in Sheila Fitzpatrick, ed., *Stalinism: New Directions* (London and New York: Routledge, 2000), p. 103.

⁹ *Ibid.*, p. 98.

¹⁰ *Ibid.*, pp. 111-112.

消してもらわなければならないものとなっているのだ。これは自己への信と体制への信との入れ替わりであり、信／不信の問題というよりも、個人における公的言語の一貫性と私的言語の一貫性との両立不可能性と考えてもよいかもしれないが、ソヴィエト社会における体制と個人は調和的に一致していたのではなく、このように片方の極度の破綻のもとに一致する可能性をもっていたにすぎないのである。

「彼〔ヘルベック〕の仕事における数ある長所の一つは、明示的でないにせよ否応なく下されるソヴィエト的主体の定義である。それによればソヴィエト的主体とは、言説によってダメージを受けた個人、イデオロギー的に言うならば虐待家庭の犠牲者ということだ」。親密圏研究をレビューしたエリック・ナイマンはこのように幾分アイロニカルに評価し、スターリン主義的主体というものが形成されていたとしても、それはネイティヴ・スピーカーが一人もいない言語を意識的に獲得するのにも似た「不自然」な作業なのであり、場合によっては非常にトラウマ的なものだったのだと主張する。その際ナイマンはアンドレイ・プラトノフを引用しながら、意識的につくられたユートピアに参入するために多くの人が自らの身体を切断して切り縮め、自らを不具にせねばならなかったのだと言う。¹¹

本論集のテーマと関係して重要なのは、ナイマンのテキストにおいて、イデオロギー的言語によって作り出されるスターリン主義的主体というものの相関項として突然、傷つき歪められた身体が現れていることだ。主体がイデオロギー言語の外部には存在しないとしても、この傷ついた身体だけは、外部にあるものとして想像される。アーカイヴの極秘資料や日記といった内的・個人的なテキストの奥深くへどれだけ探索を続けてもイデオロギー言語の外部が見つからないという状況、つまりウソではない本音のようなものがテキストとして残っていないことが明らかになった状況において、本音(外部)が書き込まれる媒体としては身体しか残されていないと想定されるようになるのだ。死にゆく者が自分の最後の言葉を他人に暗記させ、この記憶媒体的な他人の身体がのちの時代にそれを公にするといった逸話はよく知られているが、ここでは、そのような意識的な記憶にもとどめられないものをとどめるもの、主体の意図にかかわらずウソとは言えないイデオロギーの外部を物理的に刻み込んでしまう特権的な記憶媒体として、無意識的な身体というものが必然的に要請されるのであり、そのような身体は、何かを書き込まれているがゆえに、傷つき、不具にされ、抑圧されたものとして考えられるようになるだろう。ウソ／ホントという論理的・言語的な対立が取り除かれると、それは今度はイデオロギー言語／傷ついた身体という対立概念として復活するのである。

¹¹ Eric Naiman, "On Soviet Subjects and the Scholars Who Make Them," *The Russian Review* 60:3 (2001), pp. 314-315.

3. 「オーダーメイドのドイツ人」1 テクスト統制と現実の分裂

同様の問題構成をもつケースをもう一つ挙げてみたい。ミハイル・ルイクリンは「オーダーメイドのドイツ人 社会主義リアリズムにおけるファシスト像」¹² という論文において、第二次世界大戦中にナチス占領下に入ったソ連地域の人々の状況を扱った二つのテキストを比較している（両方ともまだ戦時中の 1943 年頃に構想が浮上したものである）。一つは『黒書』と呼ばれるルポルタージュで、「ユダヤ人反ファシズム委員会」の作家・学者・ジャーナリストらがソ連共産党中央委員会の承諾を得て、ジェノサイドを行ったドイツ兵に対する尋問資料、その被害者やソ連兵の証言、作家たちによる再話などを編集した本だ。しかしこの本がナチスの暴力を明らかにしようとすると、同時に、占領下におかれた住民が占領軍側について一緒にユダヤ人虐殺に加わったことまでもがどうしても明らかになってしまうことがわかったため、以来ロシアでは現在に至るまで『黒書』は発禁となり、「反ファシスト委員会」の幹部 13 人（その大部分が『黒書』の編集に関わっていた）は後に銃殺されたという。¹³ ルイクリンによると、ドイツ側についた住民たちは農業集団化でソヴィエト政権に不満を抱いていた人々なのだが、政権はそうした国内の亀裂とそれに対して行使した自らの暴力を隠蔽するために住民たちを裏切り者とし、本もろとも自らの過去の歴史を握りつぶした。

しかし『黒書』弾圧の理由としてルイクリンがより関心を引かれているのは、その暴力描写のあり方だ。『黒書』で描かれる死刑執行人は、犠牲者との直接的な肉体的接触を強く欲しているかの印象（816）を与えるのであり、そこには純粋な余剰・享樂としての

¹² Рыклин М. Немец на заказ. Образ фашиста в соцреализме // Гюнтер Х. и Добренко Е. (ред.) Соцреалистический канон. СПб., 2000. С. 814-829. 以下、同論文からの引用は（頁数）のかたちで本文中に記す。

¹³ ルイクリンはこの論文で処刑の理由を『黒書』にのみ関連づけているが、実際にはこの出来事はスターリン時代末期に展開されたコスモポリタニズム批判キャンペーン（反ユダヤ主義運動）の一環であり、第二次世界大戦、米ソ冷戦開始、イスラエル建国などの国際情勢・ソ連の外交政策と平行し絡み合いつつ引き起こされた。

そもそも「ユダヤ人反ファシズム委員会」は、ソ連政府がアメリカのユダヤ人から独ソ戦への財政支援を募るために設立したものだが、戦後に議長ソロモン・ミホエルスは暗殺、委員会は解散、その幹部らはスパイ行為・民族主義的行為を働いたとして次々に逮捕され、でっちあげの秘密裁判ののち処刑された（関連して 100 人以上が逮捕され収容所送りなどとなった）。この裁判で、『黒書』の出版計画もユダヤ民族主義的活動に関係づけられた。またこの企画が米ソ共同で進み、資料がアメリカに送られて英語版『黒書』の一部となって出版されたことで、反ソ的行為・スパイ行為ともみなされた（『黒書』はナチスによるユダヤ人大量虐殺の証言としてニュルンベルグ裁判にも提出された）。裁判速記録や事件の経過等について、以下を参照。Наумов В.П., Краюшкин А.А., Тенцов Н.В. (сост.) Неправедный суд. Последний сталинский расстрел. М., 1994; Joshua Rubenstein and Vladimir P. Naumov, eds., *Stalin's Secret Pogrom: The Postwar Inquisition of the Jewish Anti-Fascist Committee* (New Haven: Yale UP, 2001); 亀山郁夫『大審問官スターリン』小学館、2006年、227-231、272-276頁。

不条理で反復的な暴力（818-819）があるのだとルイクリンは主張する。本来そのような享楽は暴力を行う側（余剰の担い手）にあるはずだが、暴力が表象される時、その享楽は暴力が向けられる犠牲者の身体のほうにあるように書き込まれるのであって（819）、そうした暴力描写は期せずしてサドの小説のようなポルノグラフィの様相を呈することになる。ルイクリンによればこれは「ソヴィエトの言語文化にとっての根源的な禁止を破る」ことであるとともに、「ドイツだけでなくソヴィエトのテロル機械の隠されたバネをもむきだしにしてしまう」（820）がゆえに、絶対に弾圧されねばならないものだった。¹⁴

ルイクリンがこのような身体表象の性格をもつ『黒書』に対置するのは、スターリン時代のソ連文壇の重鎮アレクサンドル・ファージェエフによる『若き親衛隊』である。のちに社会主義リアリズムの古典的作品となるこの歴史戦争小説は、ソヴィエトにおいてまだ敵国ドイツの形象というものが定まっていなかった当時、ソヴィエト文化における対独戦の描き方の規範・正統となるかどうかで『黒書』と競っていたのだという。地下組織をつくって占領軍に対するレジスタンス活動を繰りひろげる若者たちを描いたこの物語に対するルイクリンの批判は、一言でいえば、『黒書』に存在する余剰が完全に欠落しているということだ。「拷問・不具・苦悶のディテールを書くことの禁止があまりに強力」（824）で、検閲官の口に合うように書かれた都合のよいこのテキストにおいて、ユダヤ人に対する暴力は全く描かれず、ドイツ人とソヴィエト愛国主義者たちとの対立はかなり「心地よい関係」となっている（827）。そして「敵の形象の非現実化、またそれをまるごとねつ造された登場人物たちに置き換えるという基本的課題を作家はうまくこなしている」（824）というのだ。この「非現実化」された敵というのが、ルイクリンの論文のタイトルになった「オーダーメイドのドイツ人 немец на заказ」、つまり体制の注文に応じてつくられたドイツ人なのであり、この虚構の小説の読解においても「つくられた」感と「リアル」、ウソとホントという対立が生じていることがわかるだろう。

¹⁴ エレンブルグを中心としたロシア語版『黒書』の編集過程について、被告の一人となったソロモン・ブレグマンはこう発言している。「エレンブルグとグロスマンの資料のほうの方がより知的に整理され、政治的にも重みがあり、はるかに出来のよいものでした。それにユダヤ人反ファシズム委員会の資料には現実を歪曲した政治的的局面がいくつも見つかったのです。そうした箇所ではウクライナとベラルーシの住民がドイツ人と一緒になってユダヤ人絶滅に関わったという指摘さえあります。一方グロスマンの資料では逆のことが強調されていて、ウクライナとベラルーシの市民がユダヤ人を救いかくまったという事例が少なからず引かれていました」。Неправедный суд. С. 226. さらにこの速記録の英訳版には注がついており、エレンブルグとグロスマンの資料からもソ連市民が虐殺に加担したという記述が削除され、エレンブルグはこの検閲を悔しがったということが指摘してある。Stalin's Secret Pogrom, p. 319. つまり『黒書』の執筆・編集過程においても内的・外的検閲が厳しくテキストを統制していたのであり、『黒書』に真実・暴力があますところなく描ききられていたというわけではない。ちなみにソ連崩壊後にイスラエルで出版された版では、削除された部分がかかなり復元されているという。

だが注意したいのは、『若き親衛隊』は事実資料に基づいて書かれた歴史戦争ものであるにしろ、あくまでも小説・フィクションだということである。そのように虚構が前提となっているはずのテキストのなかの人物像を「非現実的」「ねつ造された登場人物」と批判することは、少なくともフィクションを扱う文学研究において妥当なやり方なのだろうか。ウソ／ホントという対立を歴史的テキストや事実報道のテキストに適用するのは当然としても、虚構としての文学作品が真偽、現実との対応関係によって価値づけされねばならなくなるというのはどういうことなのだろうか。¹⁵

ここで問題なのは、ソヴィエト社会における虚構概念と現実概念との関係性の根本的な変容だと思われる。現実が言語によって語られるほかないものであれ、一定の現実というものを前提とすることによってしか虚構概念が成立しないのだとすれば、その前提としての現実自体が虚構（つまり体制によってでっちあげられた「現実」）とみなされるようになったとき、文学の本来的な虚構性そのものも意味をなさなくなっているのではないだろうか。

ミハイル・ヤンポリスキーは「生の勝利〔＝祝典〕としての検閲」という論文において、20年代の偉大な芸術家たちはみな30年代になって形式主義者として批判されたが、このとき彼らは、非常に多様な現実というものを一定の形式的な命令に従属させ、生の充溢と芸術生産を制限してしまう者として扱われたのだとしている。そして20年代末からの検閲は、そうした芸術的規範の抑圧と戦う英雄的な戦士として、生を肯定するという驚くべき機能を帯びたものとして現れるのだと述べる。たとえば社会主義リアリズム文学の模範となる小説を書いたフョードル・グラトコフは、これもまた社会主義リアリズムの先駆的作品の映画化である『チャパーエフ』について、「『チャパーエフ』は生そのものだ。それはこの時代の深く真実味のある像のなかに具現化している。[...] この映画によってわれわれは形式主義を粉々に打ち砕くのだ」と語った。ヤンポリスキーによれば、こうした議論においては「本来形式のあるべきところに、生き生きとして全一的

¹⁵ ファージェーエフは、登場人物のモデルとなった実在の人物の家族から、物語が現実と異なるという抗議を受けた場合など再三にわたり、『若き親衛隊』は歴史書ではなく芸術的虚構なのだと弁解した。Иоффе И.А. и Петрова Н.К. (сост.) «Молодая Гвардия» (г. Краснодар): художественный образ и историческая реальность. Сборник документов и материалов. М., 2003. С. 123, 134. 作者がどんなテキストにどう責任を負うかは、そのテキストを産出・受容する言説空間によって異なってくるだろう。芸術的な文学テキストの内容がフィクショナルリアルかという争点はモデルのある文学につきものとも言えるが、本稿はそれが個人的な問題を超越国家規模の政治的・社会的な問題へと発展してしまうケースの条件を問う。実際「若き親衛隊」という出来事（地下活動に携わった100人前後の若者たちの大半が結局ナチスにつかまり処刑された）は、ファージェーエフの小説により神話化されたことで新たにいくつもの問題を引き起こし、より大きな出来事群を形成していったのだが、その際重要なファクターとなったのが、ソヴィエト社会特有の虚構／現実概念の身分関係なのである。

で有機的なもの、言語の段階にまで分節されることのないものが総合的に創造される」ことが目指されていたのである。¹⁶

言語的規範と闘って生を言祝ぐという公式言説は、一般に知られているような統制的なスターリン文化のイメージ（規範を押しつけ、生を殺してしまう）とは完全に食い違いますが、そのような言説はもちろん、体制が人々に押しつけようとしてきた「社会主義リアリズム」の教義（「社会主義」というイデオロギーを「リアリティ」としてうけとるべしという不可能な命令）にすぎない。¹⁷ しかしこの「芸術＝生」という等置は、単に現実とは全く異なる虚偽として捨て去ることのできるものではない。むしろその等置の命令の全面化こそが、ソヴィエト社会の現実のあり方を構成する基本的要素となり、その現実の認識（とりわけ、テキストはウソであり、現実とは別のところにあるという現在のわれわれにとっての認識）の基盤を構成することとなったのである。

虚構（芸術）と現実（生そのもの）の差異を強引に抹消するテキスト空間の形成が求められると、両者の等置を妨げるようなテキスト群は大規模な検閲制度によって抹消されていく。さらには、ヤンポリスキーが検閲は生の肯定者だと述べているように、検閲は書いてはならないことを削除するというネガティブな機能のみならず、もはや検閲という言葉が不相当とさえ言えるような機能——テキストの完全な書き換え、社会主義リアリズムのテキストの生産、「現実」という名の虚構の創造というポジティブな作業の全国家規模での遂行——を担っていた。¹⁸

しかしきわめて重要なのは、一方で文学あるいは芸術全体を「現実」として捉えることが強制され、他方ではポスターやスローガンや祝典といった粉飾が街頭に溶け込み、ソヴィエト社会についてよく形容されるように虚構と現実の差異が曖昧になっていったといっても、現実とテキストは相互に還元しあえるものでは全くなかったということである。

¹⁶ Ямпольский М. Цензура как торжество жизни // Язык - тело - случай. Кинематограф и поиски смысла. М., 2004. С. 227, 229.

¹⁷ ボリス・グロイスによる以下の説明を参照。「社会主義リアリズムは公然と […] 自らのミメシスの原則・戦略をこう定式化している。外的現実を厳密に「客観的」「正確」なものとして伝えることを支持しつつ、同時にこの現実自体を脚色し演出するのだ。より正確に言えば、この現実をすでにスターリンや党によって演出されたものとして受け取り、そうすることによってアヴァンギャルドがやろうとしたように創造行為を現実自体のほうに引き込むのだが、同時にそれをもっと「現実的に」、つまりアヴァンギャルドのナイーヴなユートピア主義とは逆に、考えぬかれた「リアルポリティクス」の観点から行うのである」。Гройс Б. Стиль Сталин // Утопия и обмен. М., 1993. С. 54. 邦訳は、ボリス・グロイス『全体芸術様式スターリン』亀山郁夫・古賀義顕訳、現代思潮新社、2000年。

¹⁸ Marianna Tax Choldin and Maurice Friedberg, eds., *The Red Pencil: Artists, Scholars, and Censors in the USSR*. (Boston: Unwin Hyman, 1989), pp. 87, 89, 107.

ソヴィエトの公式言説においては、現実を反映するというテキストのミメーシス的な能力に対する疑いは全く差し挟まれない。¹⁹ つまり反映するテキストと反映される現実との区分は揺らいではならない（それゆえテキストの現実反映能力自体を疑うようなテキストは許容されなくなる）。しかしこの現実を反映するというテキストは実際には、そのテキスト自体の物質性によって他の現実を覆い隠していたのである。社会主義リアリズムのテキストに書かれたことは現実や生そのものを総合的・全一的に具現化しているのだという考え方と、社会主義リアリズムのテキストは現実を構成するほんの一部にすぎないということとは全く異なるというだけではなく、むしろ前者の絶対化は後者を抑圧する能力へと転ずるのだ。

このような事態を赤間啓之は「現実の分裂」と呼び、次のように説明している。「現実が分裂すると、言葉は現実への適合性によってその真理、誤謬を計られるものではなくなる。言葉はいわゆる真偽値をもつ命題ではなくなるのである。ところがこのように真理基準から自由になった言葉（嘘）は、そこでしばしばまったくの反対物を一致させるような、おそるべき転倒、倒錯を起こしてしまう。[...] 正しいか否かの実証が意味をなくす理念的な世界では、しばしば絶対的真理は絶対的虚偽と矛盾なく両立してしまうのである」。²⁰ ミハイル・バフチンの言語哲学のなかにソヴィエト文化の全体主義的傾向との相同性を見てとるルイクリンは、この「転倒」のことを別の言葉で語っている。「当時の言語文化の外的現実となっていたのは言語なき暴力の全体性であったが、バフチンのコンセプトにおいてそれは暴力なき言語の全体性に置き換えられる。意識と言語を全体的なものとして表象することは、テロルを不可視のもの、つまりなかったこと、起こらなかつたことにしてしまうことを意味した。結果はここで自らの原因となり、新たな本質へと転化する。逆に原因の転化とは原因が結果になることのはずだが、ここでの結果はおのれの原因の結果とはならず、自らの中に全世界を取り集めるのである」。²¹

ソヴィエト社会においてはまるでディズニーランドのように社会主義リアリズムというおとぎ話が現実になったとして、「スターリン時代のイデオロギーとその現実との間には、ほとんどいかなるギャップも存在しない。[...] イデオロギーそれ自体をのぞく他の

¹⁹ Régine Robin, *Socialist Realism: An Impossible Aesthetic*. Trans. Catherine Porter (Stanford: Stanford UP, 1992), pp. 73, 114. レジーヌ・ロバンはベリンスキー以降のリアリズム文学・批評史を辿り、言語の物質性を問わずにテキスト外の指示対象をフィクションのなかに持ち込もうとする美学が、変奏を繰り返しながらも同じ問題設定を保って1920年代末から30年代のソヴィエトの文学理論の基盤となっていたことを論じている。

²⁰ 赤間啓之『分裂する現実 ヴァーチャル時代の思想』日本放送出版協会、1997年、196-197頁。

²¹ Рыклин М. Сознание в речевой культуре // Террорологии. Гарту-Москва, 1992. С. 18-19. 邦訳は、ミハイル・ルイクリン「言語文化における意識」番場俊訳、『ミハイル・バフチンの時空』せりか書房、1997年。

現実は一切残らなかった²²と主張する立場もあるが、それはこのイデオロギーが生み出す「現実」概念の排他的・抑圧的機能それ自体の産物である。現実と虚構の差異の撤去という目論みは実際には逆に、一貫性のあるテキストに還元されえない現実というものを呼び出し、現実それ自体を内部矛盾させていったかもしれないのだ。

赤間は『分裂する現実』という自著のタイトルを1930年代のソヴィエト社会の現実認識にまつわる小林秀雄の言葉から引いている。大テロルが本格化する1936年、アンドレ・ジイドがソ連を訪問して『ソヴィエト旅行記』という紀行文を綴ったが、この自著でジイドは「ソ連の民衆は活発で嬉々としている」と描写するかと思えば、数頁後には「個性を失って無気力だ」と述べているとして、ソ連共産党機関紙『プラウダ』はその記述の非一貫性を指摘し、ジイドの「転向」を激しく非難した。日本では、雑誌『文学界』の座談会でこのジイドの記述の矛盾が話題となり、小林がそれを、言葉の分裂ではなく「現実の分裂」だと言い表したのである。²³ 赤間はこの小林の発言を受けつつ、「現実が分裂の様相を呈するのは、じつは、絶対化した言葉が隅から隅まで現実を覆いつくし、その圧力に現実が耐えきれなくなるから」だと述べる。言葉は相対的な自律性を備えたものではあるが（あるいはそうであるからこそ）、言葉に対応する現実の確認、つまり一種の「言葉の清算」を行わずにそれを先送りし続けると、そのツケとして現実そのものが分裂してしまうのだ。²⁴

こうして言語テキストの完結した世界は、現実全体と等価であると主張するがゆえに現実との対応性を問われることになるが、それは同時に、この世界が現実参照できないような虚構、まるごとウソの世界となって立ち現れる可能性と表裏一体になっていることを意味する（ただしこの言語的世界の虚構性、現実の分裂が、事後的あるいは外国人の視点、つまりこの言語空間の外部の視点を介さずに言語化される可能性は少ない）。先述のナイマンは、親密圏研究が「言語を真に受けている」と批判し、こう論じている。かつてカテリーナ・クラークが、社会主義リアリズム文学は美学的観点ではなく知的・歴史的観点からなら読むに値すると述べたけれども、そうではなく逆に、当時のテキストは文学・フィクションとして以外には読みようがないと。実際、第二次大戦中にはフィクションともドキュメンタリーとも言い難いような戦争文学が大量に生み出されていたのであり、ルイクリンが指摘しているように、『若き親衛隊』と『黒書』は双方ともフィクションでもドキュメンタリーでもあるようなテキストだった（818）。またルイクリンはソヴィエト文化を「言語文化 *речевая культура*」と呼び、文学という自律的空間の成立しないこの文化を次のように描いている。「〔ソヴィエト文化における〕集団的身体は本

²² Эпштейн М. Постмодерн в России. Литература и теория. М., 2000. С. 57. 邦訳は、ミハイル・エプштейン「ポストモダニズムとコミュニズム」望月哲男訳、『現代思想』1997年4月号。

²³ 赤間、前掲書、59-65頁。

²⁴ 同書、170, 53頁。

質的に文学的 *литературные* ではなく、言語的 *речевые* である。文学的でないというのは、言語外的な存在、言語から自律した存在の可能性を奪われているからだ。西欧文学においては言語によって作り上げられる身体が言語であることを超えた自律的存在となるのに対し、ソヴィエトの言語文化は「文学 *литература* をコンヴェンショナルで洗練された文学 *словестность* の枠組みのなかに閉ざす可能性を否定し、文学の中に現実それ自体〔強調原文〕を見る」。²⁵

このように文学という虚構世界を生み出す場の自律が許されず、ドキュメンタリーとフィクションというジャンル概念が崩壊しているとすれば、もともとフィクションに属しているはずのものをフィクショナルだと批判するルイクリンの言葉も不思議なものではなくなるだろう。²⁶ それに加え、ここで言われている「現実それ自体」とはルイクリンにとっては「空虚で荒廃した指示対象」であり、その「現実原則のうちに形成された空隙は、言語によって、集団的な発話の連鎖によって念入りに塞がれる」もの、²⁷ つまりウソの言葉に埋め尽くされた現実にすぎない。虚構世界が制度として許容されないということ（「文学の中に現実それ自体を見る」）は逆説的にも、「現実それ自体」とされるものが虚構的になるということなのだ。そしてまさにそのことによってこの「現実」は抑圧的となるのであり、『若き親衛隊』を批判するルイクリンは、この「現実」という虚構による抑圧を批判し、それによって抑圧されているものを救出しようとするのである。

4. 「オーダーメイドのドイツ人」2 外在的／内在的／媒介的身体について

では何が救出されるべきなのか。「ソヴィエト連邦は複雑きわまりないアンチ・アーカイヴを残していったので、研究者たちはそのアーカイヴのなかで入念な作業によって一つ一つの層を注意深く剥がし、最終的には原アーカイヴの輪郭を見いださねばならない」

²⁵ Рыклин М. Террорологии-II // Террорологии. С. 206, 194.

²⁶ この特殊なテキスト空間について、「若き親衛隊」にまつわる歴史的・社会的問題を解明するために結成された 1965 年の調査委員会による以下の見解を参照。「多くの人が小説『若き親衛隊』を厳密なドキュメンタリー作品だと受けとめていた。一方 А・ファージェーフは親衛隊員リディア・アンドロソワの両親に宛てた手紙にこう書いている。「私の小説の主人公たちは本名を名乗っていますが、私は「若き親衛隊」の歴史を書いたのではなく芸術作品を書いたのであって、そのなかには多くの虚構や、虚構の名前さえ含まれているのであり、小説はそれに対する権利をもっているのです」。[...] この発言にもかかわらず、小説『若き親衛隊』は相変わらず、若き親衛隊員の活動に照明を当てたものとしては、歴史的に真実どおりで記録文書に根拠づけられた唯一の作品だと受けとめられてきた。1959 年までずっと、あらゆる書籍・論文・博物館の展示・展覧会・戯曲・映画において、「若き親衛隊」参加者の活動と出来事は А・ファージェーフの小説に書いてあるとおりに描かれた」。«Молодая Гвардия» (г. Краснодар). С. 185. しかしこの比較的早期の的確な指摘は封印され、ペレストロイカ期まである程度同じ言説構造が保たれる。

²⁷ Рыклин М. Террорологии-II. С. 200.

(817)。このようなルイクリンの言葉はゲッティとナウーモフによく似ている。アーカイヴ資料の分析においては、ポリシェヴィキ語がどのように書き記されていたかに焦点があてられるべきだが、それは最終的にはやはりウソからホントを選び分ける作業にならざるをえないのである。ただしルイクリンの関心は、単に史実やウソの論理の正確な把握にのみあるわけではない。『若き親衛隊』がすべてウソっぽいと考えるルイクリンは、それを『黒書』に対置させてこう述べる。

彼〔ファジェーエフ〕は、痛みの記号を書き込めるような身体を根絶してしまっている。そのような痛みこそ『黒書』の主要テーマであるのだが。書き込みの可能性は廃棄されている。なぜなら、そのような記号を受けとめることのできるユニークな表面——人間の身体——は一掃されているのだから。痛みは残る。しかしそれは身体ではないどこかほかのところに保存される。(824)

ここに見られるのはナイマンとほとんど同じ図式である。体制にとって受け入れ可能な敵や犠牲者像しか生み出さない完璧なスターリン主義的テキストを「言説の暴力」(817)と読むならば、そこにはテキストを支える現実としての身体の痛みが現れるはずなのだ。そしてそのような身体の在／不在が、テキストの内容の本当っぽさ／ウソっぽさを分ける基準となる。

確かに、ソヴィエト体制にとってのタブーである、つまりソヴィエトのテキスト空間の外部にある『黒書』には、身体の受ける痛みが具体的に刻み込まれているだろう。このテキスト空間の外部に身をおくわれわれは、つねにこうした外部との対比関係において内部のテキスト（スターリン主義的テキスト）を読まねばならないし、おのずとそうしてしまうだろう。ただ内部と向き合うときわれわれは、外部を身体の実在証明として持ち出し、内部に不在の身体を遡及的に想定するだけでよいのだろうか。ここではスターリン主義的テキストの分析の果てにこのような抽象的な「身体」が出てくることを否定するわけではない。むしろ本論は、そうした「身体」という観念が発生しやすくなる条件が、スターリン主義的テキストを構成する空間に備わっていることについて考えようとしてきた。しかしそうではあるが、スターリン主義的テキストに身体が不在だとして、この不在の身体にのみ暴力の痕跡の存在を賭けるだけでは、スターリン文化における身体の問題の考察としては不十分である。なぜならルイクリン自身が指摘するとおり、身体が受ける暴力の不可視性（外在性）をつくりだすのはまさに言語の全体性であるからだ。そうであるならば、われわれは社会主義リアリズムという言語テキストにおける不可視の外部を安易に想像するのではなく、そこにこの不可視化のメカニズムをより注意深く読み取っていく必要があるのではないだろうか。

第2章でとりあげたナイマンは、スターリン時代のテキストだけでなく、それを対象とする研究者の分析自体も「言葉の勝利」を謳うものであるとして、危惧を表している。

「われわれは全体主義それ自体が望むように全体主義を読んでいないか？」と。そして言語による全体主義の外部に、言語によって傷ついた不在の身体を思い描き、プラトーフ作品において「自己切断が新しいユートピアへの入場券とみなされていた」ように、「プラトーフの考えではおそらく、彼の同時代人の多くも、二次元的なポスター〔ユートピア世界〕へと己を切り縮めるために己を不具にしていたのだ」とする。すなわちナイマンにおいては、イデオロギー言語の外部に想定される身体は義務（入場券）として不具になっていなければならない。「理想的なスターリン主義的主体とは、言い換えれば切り詰められた人間なのである」。²⁸

ナイマンの弟子であるリーリャ・カガノフスキーは、まさにこの身体切断が社会主義リアリズムの肯定的主人公（主に男性）に必然的に求められる「身体的義務」なのだという議論を展開する。有名な社会主義リアリズム小説『鋼鉄はいかにして鍛えられたか』の主人公パーヴェル・コルチャーギンとその作者ニコライ・オストロフスキーは、理想的なソヴィエト人としてスターリン時代に英雄化された形象であるが、彼らは社会主義建設のために自らの身体を酷使し、倒れても倒れても自分にトラウマを与えた場所（建設現場）に回帰して身体を痛め続け、その果てに失明・全身麻痺を起こして生きた「ミイラ」と化す。しかしカガノフスキーにとってコルチャーギンは強制労働の犠牲者ではない。なぜなら「過激な身体切断が進むのとぴったり平行して、彼はソヴィエトの官僚制の序列を上昇し、新しいソヴィエト国家のメンバーシップを獲得する」²⁹ からだ。つまり己の身体に対する強迫的な攻撃は、肯定的主人公というスターリン主義的主体の創出プログラムの一環としてそこに組み込まれたものであって、彼らの身体上の傷はイデオロギー言語によるダメージなどではなく、言語が授ける勲章なのである。

カガノフスキーの主人公はヘルベックの日記執筆者と酷似している。これらのスターリン主義的主体はともに、イデオロギーに極度に同一化することによって自己破壊していくのだが、注目すべきなのは、ナイマンがヘルベックの主人公の綴る言語の外部に見いだそうとした身体が、カガノフスキーにおいて完全にイデオロギー言語の射程内に捉えられていることだ。特定のテキストに不在だがその外部にはきっと存在するはずというナイマンの身体は、スターリン主義的テキストに不可欠な構成要素へと反転してしまう。われわれはいまや、全体主義それ自体が望むように全体主義の身体を読んでいるのだ。

もちろんルイクリンからすれば、カガノフスキーの主人公の身体は身体と呼べるものではないだろう。むしろそれは彼の言う「言語的身体 *речевое тело*」である。カガノフスキーの論の特徴は、身体が受ける傷を一貫してイデオロギーの論理内部において解釈しようとする点にある。「それ自身の矛盾を抱え続けることのできるもの」としてのフィ

²⁸ Naiman, *op. cit.*, pp. 311, 314.

²⁹ Lilya Kaganovsky, “How the Soviet Man Was (Un) Made,” *Slavic Review* 63:3 (2004), p. 579.

クショナルなスターリン主義的主体（「肯定的主人公」）の形成」について考察するとして、彼女は、その矛盾である「壊れた身体というファンタジーは、主体が理想になるのを妨げるためにテキスト内に設けられた遮断棒だ」とする（なぜなら主体がスターリンに体现される理想と一致してしまうと、確固としたものであるべき権力関係が崩れるからだ）。それゆえ「主人公の肉体的もしくは精神的な負傷はまさしく彼が市民社会で機能することを許可するもの〔強調原文〕」であり、「身体切断は社会主義リアリズムのテキスト内の裂け目ではなく「義務」である」。³⁰

カガノフスキーは、すべての暴力をスターリン主義的主体の誕生に向けた通過儀礼として肯定的主人公の身体に吸収させ、彼を犠牲者-英雄にしていくことで、その主人公の物語そのものも抑圧的な力を忘却させ、暴力を正当化する物語を再話しているのでもあり、そこにはほとんど倫理的な問題が生じているとさえ言えるだろう。³¹ しかし他方で彼女の読解においては、社会主義リアリズムのテキスト内部において、肯定的主人公の疎外された身体が、スターリン主義的主体の同一化するイデオロギーに対する激しい物質的摩擦・抵抗を示していることが明らかにされている（ただしこの摩擦が生じる境界面としての身体は、カガノフスキー自身がすぐさまイデオロギーの論理によって覆い尽くしてしまうのであるが）。それゆえにここで主張したいのは、単に社会主義リアリズムのテキストはウソであるとしてしまわずに、そのウソこそが抑圧的な力として外部を構成する当のものであり、排除された外部を呼び出すために必要とされるものだということである。³² イデオロギーの生み出す物語に積極的に組み込まれた身体と同様、そのような物語から完全に排除されたと考えられる外在・不在の身体も、その物語の効果によってはじめて思考されるようになるものだ。物語の内部と外部は全く関係のない二者なのではなく、肯定的にであれ否定的にであれ同じ物語の輪郭を共有している。そ

³⁰ Lilya Kaganovsky, *Bodily Remains: The 'Positive Hero' in Stalinist Fiction*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley, 2000, pp. 33, 38, 40, 41.

³¹ 問題は、「平均的な市民、「普通のソヴィエト人」はつねにすでに肯定的主人公によって置き換えられ、すでにそのユートピア的対応物によって置き換えられていた」、「フィクションと現実融合していた」ということを、権力や暴力の局面をほとんど抜きに断定してしまうことにある。*Ibid.*, p. 17. 「融合」と見えるものは、暴力的な置換（等置）とその帰結としての「現実の分裂」を隠蔽している（本稿第3章参照）。

³² こうした考え方はルイクリン自身の全体主義論から導かれるはずのものである。ただルイクリンがナチス像の本当らしさ／ウソっぽさにこだわるのは、それが彼の個人的経験と切り離せない問題だからかもしれない。ルイクリンの母はナチスによるユダヤ人虐殺を目の当たりにし（彼女の祖父母、つまりルイクリンの曾祖父母も殺された）、かろうじてそこから逃れてきた。ルイクリンは彼女の話に同一化するとともに、同一化の不可能性（自分が生まれてこなかった可能性）を経験するという。

また母の話のなかでルイクリンが重要とみなすのは、ソ連におけるナチスの暴力の可視性である。一方「人民の敵」として逮捕・処刑されたルイクリンの祖父に対するソヴィエト権力の暴力は、集団的な言語に覆い隠され不可視性のうちにとどまっていた。

Рыклин М. Пространства ликования. Тоталитаризм и различие. М., 2001. Гл. I.

のような意味で、カガノフスキーの肯定的主人公の身体がとどめる暴力の痕跡は、なんらかのかたちで、体制の生み出す物語に回収されえない暴力を指し示すものとして読まれる可能性を秘めているとも考えられるだろう。³³

ここで『若き親衛隊』のテキストに戻ろう。ルイクリンは先に引いたように、この小説において痛みは「身体ではないどこかほかのところ」に残ると述べていた。それはテキストのある箇所——印象的なファシスト像が現れる——を指している。

拷問・殺害を仕事とするペーター・フェンボングという名の SS 士官は、「女の声でパイパイとしゃべる」太った男で、仲間も顔をそむけずにはおれないほど堪えがたい悪臭をつねに放っているが、誰一人として彼が体を洗うところを見たことがない。というのも彼は「下着の下に身につけているものを誰かに見られるのを恐れていたからだ」。³⁴ あるとき上官から解放されたフェンボングはこっそり体を洗う。そこで、彼が裸の体にじかにベルトを巻きつけており、ベルトについたたくさんのポケットに死者や生者から抜き取った金歯や宝石、各国紙幣などを溜め込んでいることが明らかにされるのである。

ベルトをはずすとフェンボングはかゆさから体じゅうを猛烈に搔き、その快感に от наслаждения うめき声をあげたのち、ポケットの中身をテーブルに広げて鑑賞するが、それと同時に自分の空想のなかのブルジョア紳士と議論を始める。自分は汚いことに手を染め、そのため臭く汚い自分の身体に耐えねばならないが、しかし本質的には自分も「きれいに体を洗った」人品いやしからぬ紳士と何の変わりもない、肉挽き器を動かす自分のような者のおかげであなたがたの富の蓄積が可能になるのだ、「私はあなたの分身なのだ」³⁵ ……。こう断定したフェンボングは、擬似的な論争に勝って自己満足し、快感に от наслаждения 金切り声を立てながら体を洗いはじめる (F370-374)。

この直後にフェンボングは、地下組織を指導する共産党員たちを生き埋めにする処刑の実施を指揮し、小説の終結部では若き親衛隊員の大多数の殺害に加わるが、彼と犠牲

³³ カガノフスキーは、ミイラとなっても社会建設の場に戻ってこようとするコルチャーギンの反復強迫を「ばかげた享楽」と呼び、イデオロギーに過剰に同一化した主体の到達点にイデオロギーの外部を見る。その労働にはもはやいかなる実質的な価値も見いだせないにもかかわらず、コルチャーギンはただ純粋な欲動に突き動かされて自動人形のごとく身体損傷を繰り返す。それはすでに、体制が求めるイデオロギーの滞りない機能を妨げるものとなっているのだという。Kaganovsky, “How the Soviet Man Was (Un)Made,” pp. 592, 596.

³⁴ Фадеев А. Молодая гвардия // Соб. соч. в 4-х томах, т. 3, М., 1979. С. 172-173, 369. 邦訳は、ア・ファヂェーエフ『若き親衛隊』(1)-(5) 黒田辰男訳、青木書店、1953-1954年。『若き親衛隊』は1945年に発表されてベストセラーとなり、翌年にはスターリン賞を受賞した。しかし1947年、この親衛隊の活動における党の指導的役割が描けていないという党からの批判を受け、ファヂェーエフは1951年に改作を出版した。本論ではルイクリンにならない改作版を使用する。また同書からの引用は、以下、(F頁数)のかたちで本文中に記す。

³⁵ 「私はあなたの分身なのだ、私——それはあなたなのだ」というセリフは改作時に付け加えられた。黒田辰男「解説」ファヂェーエフ、前掲書(3)、251頁。

者らとの肉体的接触の描写は皆無に等しい（唯一の接触は、フェンボングが共産黨員たちに投げ飛ばされる箇所くらいである）。ルイクリンは、この入浴のシーンに「痛み」が移動されているにもかかわらず、その痛みは「本源的蓄積」には収奪が伴う、ブルジョア資本家は殺人者に等しい、といったソヴィエト体制にとって正しく整合性のある説明に回収され、「痛みを与える享樂と結びついた非生産的な余剰が全く残らない」（825）と批判する。確かにこうしたファシスト像は一面では単なるカリカチュアであり、フェンボングの自己弁護の語りに現れる殺人や搾取には、身体の痛みとしての余剰は一切認められないかもしれない。だがそれでは、フェンボングの悪臭を放つ身体への執拗な言及、またそこから彼がしばしば感じる快感・享樂 *наслаждение* は、いったい何なのだろうか。それらはすべて、単にソヴィエト体制にとって都合のよい倒錯的ファシスト像の一部にすぎないのだろうか。

ルイクリンが指摘するように、フェンボングは殺人を金儲けのプロセスと捉え、その手続きにはほとんど関心を払わない。「逮捕された一団に金歯をはめた人々を見つけると、こんな訊問の手続きは早々に終了してさっさと殺すことができればいいのに、と望んでいる自分に気づくのがだった」（F372）。そして彼は空想の紳士に向かって言う。「私だって一生これを続けるつもりじゃあさらさらないんですよ。そのうち普通の実業家か商売人か、お望みならただの店主にでもなりましょう、でもね、先立つものってのが必要なんです！」（F372）。金銭はフェンボングの殺人行為を合理化する説明である。

だが他方で「通貨は、その抽象的性格によって、ファンタスムの普遍的に理解可能な等価物を構成する」ものでもある。³⁶ ピエール・クロソウスキーによると、身体への倒錯的な欲求は、本来的に他人には理解不可能・交換不可能なファンタスムに基づくものだが、ファンタスムは芸術作品や商品といったシミュラークル（ファンタスムの代替物として主体の外部に生産されるもの）によって交換可能となるのであり、貨幣はそうした交換可能なシミュラークルの最終形態である。だから「反規範性の閉じた世界〔倒錯的ファンタスムの世界〕と制度的規範の世界〔合理的な産業社会〕のあいだで金銭がはたす媒介の機能〔強調原文〕」³⁷ によって、フェンボングは暴力的な身体接触から得られる享樂を抑圧して（読者はフェンボングが暴力に携わっていることを想像できはするが、重要なのは彼が行うであろう暴力が具体的にはほとんど表象されないことだ）、それを普遍的な富の記号（金や貨幣）に変え、この記号に犠牲者の身体と享樂を代理表象させているのでもある（「本源的蓄積」における暴力の享樂的側面）。さらにフェンボングにとって金や貨幣はそれ自体が享樂をもたらす対象となっており、彼はそれをつねに直接身体に接触させて所持している。「紙幣のなかにはきれいに束ねられたソヴィエトの「青札」、つまり百ルーブルの札束もあったが、彼はそれに物質的利益など少しも期待していな

³⁶ ピエール・クロソウスキー『生きた貨幣』兼子正勝訳、青土社、2000年、114頁。

³⁷ 同書、114頁。

かった。それを手元に残しておいたのは、彼の貪欲がマニアックなコレクション的情熱の域にまで達していたからである」(F371)。

ルイクリンは、フェンボングが一方で物質的利益を求めているのに、他方で無価値のコレクションをしていること、「コレクションが収奪の直接的延長になっている」ことは、つじつまが合わず「敵を非現実化し不条理にする」ものであり、フェンボングは「歴史的にありえない」SS像だと批判する(822, 823)。だがもしルイクリンの言うようにフェンボングがソ連体制の注文に応じてつくられた都合のよい敵像なのだとしたら、この「不条理」な形象はソヴィエトにとっての他者ではなく自己の一部とみなしたほうがよいのではないだろうか。フェンボングは、『黒書』に描かれるような、あるいはルイクリンの母が経験したような、スターリン主義的テキスト外部のファシスト像を参照にそのリアリティを問われるべきものというよりも、ソヴィエト体制そのものとして読まれるべきテキストなのではないだろうか。³⁸

そうした視点からテキストのこの箇所で最終的に何が行われるのかという点に立ち戻ると、より重要なのは、ルイクリンが「中心的シーン」(822)とみなす紳士との対話ではなく、フェンボングの入浴そのものであるように思われる。入浴という行為、自分の身体に染みつきその一部となった汚れ——「何ヶ月も着替えなかった下着は、ねばねばして、すえた汗が染み込んで悪臭を放ち、軍服の裏地から移った色で黄ばみ黒ずんでいた」(F370)——を落とす行為は、ジュリア・クリステヴァの言うアブジェクション(棄却行為)にはほかならない。クリステヴァによれば、アブジェクト(棄却されるべきおぞましきもの)とは、いまだ対象ではなく自己の一部であるが、自己から分離されるべきものである。『若き親衛隊』におけるドイツ人の形象がソヴィエトの自己としてのテキストを構成する一部だとするならば、フェンボングが自分の汚れを洗い流すこのシーンは、ソヴィエト体制、あるいは社会主義リアリズムのテキスト自体によって為されるアブジェクションでもあるのだ。後者のアブジェクトはフェンボングの身体そのものである。おぞましきものとしての彼を自らの中から生み出し、それを敵として己から切り離すことで、ソヴィエトのテキストは浄化されようとする。

だがクリステヴァによれば、アブジェクションはナルシズムの危機という局面でもあるのであって、「私がそこに自分の姿を映してみる、もしくは自分を認知する、多かれ少なかれ美しい^{イミージュ}像はアブジェクションの上に築かれており、常時監視するのを怠らぬ抑圧が弛緩すると、アブジェクションはこの像に亀裂を生じさせる」。³⁹ 若き親衛隊員の

³⁸ 「殺人者ファシスト＝ブルジョア資本家」というソヴィエトのプロパガンダ的なマルクス主義が、敵であるフェンボングによって滔々と語られるというねじれも、そのことを示している。ルイクリンはこのくだりを、「事物の本質を見抜く社会主義リアリズムの洞察力の手本」として学校で教わったという(822)。

³⁹ ジュリア・クリステヴァ『恐怖の権力 〈アブジェクション〉 試論』枝川昌雄訳、法政大学出版社、1984年、20頁。

身体を痛めつけ、彼らを美しい肯定的主人公にしていくための道具にすぎないはずのフェンボングの暴力は、貨幣によって合理的に根拠づけられることを求めるが、貨幣はそれがもつもう一つの側面、享樂（倒錯的ファンタズム）を引き出すことによって、フェンボングの暴力のベクトルを変化させる。彼の汚れた身体＝貨幣は、テキスト内の身体（スターリン主義的主体としての若き親衛隊員の身体）と不可視の外的身体（享樂的暴力を受けているであろう身体）を媒介する境界面としての身体なのだ。

紳士との論争後にフェンボングが体を洗うと、貨幣からも汚れは洗い流され、「きれいに体を洗った」ブルジョア紳士の所有する富と清潔さにおいて大差がなくならねばならない（フェンボングから見ると、自分も紳士も大差ない仕事をしているのだから）。しかしルイクリンも目を留めているように、「彼はきれいさっぱり洗えたというわけではなかったが、それでも楽になって、再びベルトを巻きつけ締め直した」（F374）。汚れは完全に洗い流されうるものではなく、貨幣は産業的観点（クロソフスキーのいう「制度的規範の世界」）からのみ見られるものにはなりきれない。直接的な肉体的接触に従事しているフェンボングは貨幣を媒介にそこから距離をとろうとする。しかしその貨幣は隠されねばならず、隠すためには悪臭やかゆみや汚れが生じ、それらおぞましきものがあるがために享樂が生まれる（身体を搔き、洗い流すときの「快感」——これは他者との肉体的接触から得られる享樂の代替物である）。こういったものをとおしてフェンボングは再び身体（それも己の身体）へと回帰していかねばならない。テキストは清浄を保つために自らの汚れを棄却する⁴⁰が、アブジェクトは「自我が存在するために身をもぎ離れた忌まわしい辺境へ自我を連れ戻す」。⁴¹ 若き親衛隊員たちの身体が受ける美しいはず

⁴⁰ 『若き親衛隊』のテキストは、体制そのものとテキストの一貫性を保つため、さまざま別の現実を抑圧した。ルイクリンの述べるように、ソ連市民がユダヤ人虐殺に加わったこと、アーカイヴ資料集が示すように、小説中ではオレーグ・コシェヴォイが「若き親衛隊」のリーダー的存在として描かれるが、そこには実在したオレーグの母による創作が多分に混じっていたこと、オレーグの母はナチスともソヴィエト当局とも懇意にし、ファジュエフも主に彼女から話を聞いていたこと、彼女の話と矛盾する証言は無視されたり当局の脅しにより撤回させられたこと、何者かにより史料が改竄・破棄されたこと、小説中の裏切り者のモデルであるヴィクトル・トレチャケーヴィチの家族は公的に非難・迫害されつづけたこと、しかし実際にはトレチャケーヴィチこそ組織のリーダー格であったこと、小説の改作によりつけ加えられた党の指導的役割など実際にはほとんど存在しなかったこと、そして何よりも、小説『若き親衛隊』のテキストと矛盾する証言はすべて党や警察組織によって弾圧されたこと、などである。「Молодая Гвардия» (г. Краснодар) を参照（特に資料 27, 39, 43, 49, 65, 69）。また Hiroaki Kuromiya, ““Molodaia gvardiia” (g. Krasnodon): Khudozhestvennyi obraz i istoricheskaia real'nost': Sbornik dokumentov i materialov (review),” *Kritika* 6:3 (2005), p. 663 の指摘によれば、ソヴィエト体制から見ると裏切り者に映るナチスへの協力行為は、ウクライナの独立をかけた民族主義運動であったかもしれないのだが、そうした側面は上掲資料集所収の最新文献においても否定されている。ソ連崩壊・アーカイヴ革命後の今、テキストは棄却しつづけてきたそれらの現実が己の身体にますます強く付着してくるのを感じなければならない。

⁴¹ クリステヴァ、前掲書、23 頁。

の暴力は、フェンボングの身体の汚れに等しいのであり、そうした暴力を美化する社会主義リアリズムのテキスト自体が、自らによって棄却されねばならない汚れた身体なのである。⁴²

⁴² このような意味で、ヘルベックの着目するソヴィエト的主体の日記の位置づけも示唆的である。ヘルベックによれば、「ポドルブヌイは自分の日記を、記憶されるべき親密圏の記録とはみなしていなかった。むしろそれは彼にとって「ゴミの山」の役を果たしており、頭の中に溜まっていくあらゆる「ごみくず」や「汚物」をそこに廃棄処分することができたのである。ポドルブヌイは書くことを闘争として思い描いた。最終的に自分はこの闘争で洗い清められ、公的諸価値と完全に調和し、いかなる代替的な親密圏をも排した状態で立ち現れるのだと」。しかし彼の心の中には、警戒を怠るなど教えてくれる「官僚」のほかにもう一人の人物がいて、「私の心の中のありとあらゆる汚れや残されたゴミを拾い集めている。そして汚物の重荷から解放されるために、誰か他人の頭のうえにこの廃物をぶちまけるよい機会を待ち受けているのだ。この人物が自分のなかにいることは以前より減ったが、それでも存在する。私の出自と記憶という古傷は時折その存在を感じさせる」。そして彼が「ある種のゴミを一掃して心をきれいにできる」唯一の場所は秘密警察だった。Hellbeck, *op. cit.*, pp. 95, 98. もし社会主義リアリズムのテキストが清浄に見えたとすれば、それはこのような汚物（の排出）があるからだ。真面目なスターリン主義的主体は、こうして浄化を求め懸命に自らの汚れを処理しようとしていたのかもしれないが、そのような闘争の対価として社会主義リアリズム的なユートピアに入場することもなく、秘密警察という大規模なゴミ処理場に行き着くことが、その主体に残された唯一の道であったかもしれないのだ。

※本稿は平成18年度科学研究費補助金の助成による研究成果の一部である（課題番号17・305）。